

## 第2回滋賀県産業振興審議会 会議議事録

### 1 日 時

平成26年3月25日(火) 10:00~12:00

### 2 場 所

滋賀県庁東館7階 大会議室

### 3 出席委員

【委員】石田晃朗委員、川口清史委員、川端均委員、酒井恵美子委員、鹿田由香委員、島本さゆり委員、高瀬幸子委員、高橋祥二郎委員、種市正四郎委員、田畑直子委員、辻田素子委員、辻野宜昭委員、成瀬和子委員、藤田義嗣委員、堀秀子委員、三木清幸委員

【オブザーバー】滋賀経済団体連合会(6団体)、産業支援プラザ  
日本労働組合総連合会滋賀県連合会、市長会

【県】羽泉商工観光労働部長、田端商工観光労働部次長、ほか関係職員

※敬称略、五十音順

### 4 内 容

#### ■開会

#### (1) 商工観光労働部長挨拶

みなさん、おはようございます。お忙しいところありがとうございます。年度末のそれぞれ皆様方、ご多忙の中だと思います。立て続けに2回ということでもございまして、本当に多数ご出席いただきまして、ありがとうございます。

前回は知事から諮問をさせていただきまして、これまでの産業振興の取組、現行プランの進捗などについて総括・ご報告をさせていただきました。

本審議会につきましては、ご参加いただいた皆様から初回から、大変勉強させていただけるご発言をたくさんいただきまして、知事からも「これ大事よ、あれ大事よ」と言っていて、マーキングをいっぱいさせていただいたのですけれども、知事は本当に前回の皆様方のご関連なご意見を頂戴したことを喜んでおりまして、自らのフェイスブックなどにもその思いをいろいろと掲載していたようでございました。本当にありがとうございます。

本日の審議会では、本県経済の産業の現状、これら分析関係の資料をご提示申し上げまして、それを皆様で外観していただきまして、今後検討していくビジョンの論点というこ

とを洗い出しをしていただければありがたいと思っております。

特にそれぞれの業界等の現状でありますとか、それぞれのお立場からの分析などを踏まえまして、ご助言・ご意見等頂戴できれば大変ありがたいと考えております。よろしく願いいたします。

今後でございますけれども、予定ということで前回の資料にもお付けしたかと思いますが、来年度になりますといただきましたご意見を踏まえまして、骨子にあたるものを作って参りたいと考えております。この時には広く企業、諸団体様のご意見もあわせて伺っていくということを考えておりまして、予定としては5月に骨子案、7～8月頃に原案、県民政策コメントもさせていただきまして、9～10月頃に最終審議、10～11月頃に答申というようなかたちで、今年度2回でベースの議論をいただいて、そのあとこのようなスケジュールで進めたいと思っております。

それでは、何卒よろしくご議論賜りますようお願い申しあげまして、ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

## (2) 委員自己紹介

### <委員>

会社を40数年やってまいりまして、特にITという非常に日進月歩の激しい中でずっと身を置いてきまして、そのITの進化というのは、まさに人間の思考の進化と非常によく似ており、それがトーマス・フリードマンの言うフラット化社会という今日の現実的な社会では、産業が大変、変化・進化していつている中にあります。いかに未来をつくりあげていくかということについては、私もいつも考えていることではございますが、そのような意味でこの産業ビジョンの審議に参加させていただきまして何かそれなりに意見を話せば良いなと思っております。

お見受けしますと、大変重い会議のように見えますので、できるだけ闊達に会長の下で良い意見が出せればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。ありがとうございます。

## ■議題

### (1) 本県経済・産業の現状と分析について

#### <会長>

皆様おはようございます。今日の審議の大きな課題は、現状の認識を共有しながら滋賀県の産業は何が問題なのかという、問題を鮮明にしたいと思っております。そのうえで、何を議論すべきなのかという論点設定を行いたい。教師みたいな言い方で申し訳ないのですが、アジェンダセッティングと呼ぶのですが、何が問題で何をしなければならぬかというアジェンダを固めることが、すべからず問題の出発点になります。アジェンダに入らなければ問題にならないことになってしまいます。そういう意味で今日の議論は大変大事でございます。

ます。何をアジェンダするか、取捨選択するのかという議論になると思います。

その前に問題の認識をしなければならない。また、ビジョンなり、夢なりという議論をどこかでしなければならない。とりあえず今日のところは、我々は何を問題にすべきか。県の方は県の方で何を問題にしているのかというのをご報告いただきますけれども、審議会の委員様はそれぞれ現場をお持ちな訳ですから、そこから見て何を問題と考えていくか、何を解決しなければいけないのかというあたりを、それぞれの現場からご発言をいただくことで、議論が生きたものなるのではないかと思います。よろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは早速ですが、滋賀県の経済産業の現状についての報告を事務局からお願ひしたいと思ひます。

#### (事務局より資料1、2に基づき説明)

##### <会長>

ありがとうございました。それでは今の滋賀県経済・産業の現状について議論をしたいので、ご質問も含めて進行していきたいと思ひます。データを見つつ現状の動きも含めてトータルにみたらどうということだというのを少しイメージを固めたら良いと思ひますが、私の印象から申し上げますと、他県と比べても滋賀県はやはり豊かな県だというのが率直な印象です。

しかしあえて何が問題だということで、今の報告を聞いて一つもう少し深めて分析をしてほしいと思うのは、一人あたりの県内総生産が全国2位であるということです。しかし雇用者報酬は全国27位となっており、この差はどこからきているのか、なぜそんな差が出てくるのか、そこはやはりかなり深めないといけない。産業構造的に言うと、製造業が非常に大きい、製造業における雇用者報酬が低い、なぜ滋賀県の場合は製造業の雇用者報酬が低いのでしょうか。そこは滋賀県の製造業における就業構造に問題はないのかというあたり。製造業はご承知のように、どんどん高度化して行って、いわゆる労働集約型のもものは外へ出して行って、外国へ出して行って、国内ではもっと高度なR&Dだとかをやっいていこうとしている。そこでの雇用者は当然研究者であったり、技術者であったり、企画であったり、報酬が高くないといけない。そこが低いというのがいったい何なのだろうか、本当に製造業が多いから良いと言えるのだろうかという問題意識として今お聞きして感じました。

##### <事務局>

今の件について、39ページをご覧いただきたいと思ひますけれども、一人あたりの県民雇用者報酬全国順位が左側に載っております。そもそも県民雇用者報酬の概念がありますけれども、よく言われておりますのは、一人あたりの県民所得は全国2位であると言わ

れております。県民所得というのはいわゆる文字通りの県民所得ではなく、国民所得と概念が一致する県内での所得、いわゆる県内での付加価値額、県内の総生産額と等しいものだと思っていただいて良いと思います。それが全国2位であると。その内訳なのですが、分配される場合には、例えば、23年度の名目値ですと県内総生産が約4兆3000億円、それが分配されると約2兆6000億円が県民雇用者報酬、企業報酬が1兆5000億円ということで、企業所得の部分がそれぐらい占めている。県民雇用者報酬を人口あたりで割ると先程の額になるということでございます。ですから、まず、企業所得が非常に多いというのが一つの原因であるということです。

次に、39ページの右側をご覧くださいますと、手元に他との比較がございません。ここで見ていただきますように、電気・ガス・サービス業等が結構上の方で高くなっておりますけれども、下の方にありますのが製造業、各種サービス、情報通信となっておりますが、これがよその県と比べてどうなのか、これが出ておりませんので、また改めてお示しをしたいと思います。

#### <会長>

どうぞ皆様の方からご発言をお願いします。

#### <委員>

会長にご指摘いただいた滋賀県の産業分布について申し上げますと、滋賀県は下請け型企業が非常に多いというのが一つ。もう一点は本社機能が少ないということが挙げられます。もう少し加えますと、ここには出ていないデータでございますけれども、人口140万人の滋賀県で上場企業が9社でございます。京都府は滋賀県の2倍弱の人口260万人弱で66社でございます。それからお隣の福井県がだいたい80万人規模で16社の上場企業がでございます。上場についてはいろいろ考え方があるわけでございますけれども、数値からいきますとそういう状況です。また、ずばりおっしゃっていただいてありがたかったですけれども、県民所得が2位や3位ということはよく出ているのですが、雇用者所得は20位台です。これは滋賀県企業の多くが労働集約型であり技術集積型でないということの反映ではないかと考えられ、やはり大きな課題です。それが上場企業の数値に表れている。そんなことをよく藤田さんとも議論しているわけでございますけれども、そこを深掘りしていただきまして、従来にない提案、切り口を出していければと思います。それともう一点申し上げますと、今日、川口会長が冒頭にご指摘いただいた点について深く掘り下げていくには、やはり滋賀にも本格的なシンクタンク機能が必要と考えます。是非そんなところも検討をお願いしたいところでございます。以上でございます。

## <委員>

今の会長のお話をお伺いする中で、このまとめられたデータなのですが、このデータがどういう時代背景から形成されてきたか、形成の背景を少し考えてみますと、ある日突然こうなったわけではありませんので、やはり滋賀県という地勢的な条件ですね、四国よりちょっと恵まれているかもしれません。そういう意味で地勢的に非常に利便性が高かったということや産業はよく水を使うので、非常に豊富な琵琶湖という水資源があったこと、あるいは兼業農家としての豊かな労働人口が背景にあったこと、そういうものをうまく行政と組合せながら展開してきて、今日では成果として成熟されたかたちでこのような姿になって出てきている。したがって10年間の動きを見ていますと、ある種従来の一つのパラダイムができて成熟していったというデータというふうに考えられます。そうしますと、成熟していくというここきて新しいその成熟から成長への展開をさせていく方向へと脱出していかないといけない、今の総理の言う成長なのかもしれませんが、そのようなことをいかに作り上げていくかということの認識をもってそこから出ていくとすると、製造業の問題と雇用の付加価値の問題がありましたけれども、これについてはおそらく従来の状況と違って、滋賀県の産業構造、内陸工業県として、優良な下請企業が多い。しかし実際はグローバルの中で非常に動いていっているために、付加価値が下がりながらも雇用を維持しているということは、非常に苦勞している状況がにじみ出ていると思います。そういう意味ではユングの揺らぎの理論ではないですけども、揺らぎながら動いていっているところが新しいパラダイムビジョンをどう作り上げていくかということが、認識のスタートであって、そこからどうビジョンを展開していくかという中で進めていくのがこのデータを見る限りそのような感じがいたします。実際はそうは言っても急に変わりませんので、そのようなところの切り口をうまく皆さんと議論していけば、ある程度方向性が見えてくるのではないかという感じがいたします。もちろん上場企業が滋賀県は少ないというのも大きな課題であって、それは若い人たちが魅力ある企業に就職したいというひとつのものとして上場会社が多いということはあるかもしれないということです。以上です。

## <会長>

多様性のある製造業だと強みですよ。ただ一方でこれはデータですけども、パナソニックさんとかダイハツさんとか東レさんとか日本を代表するグローバル企業が立地をしていて、その関連企業が非常に幅広い製造業の展開をしているというのは非常に大きな特徴ですけども、このグローバル企業はずっと滋賀県にいてくれるのですか、というのが私の疑問です。パナソニックさんは幸い草津に集約してくれたわけですけども、これはかなり幸いです。ダイハツさんも世界で競争していて、いつまでも滋賀県にいてくれるのでしょうか。誰も約束できませんよね。そのあたりのグローバル化の中での、日本企業の動向がどうなっていこうとしていて、パナソニックさんはなぜ草津に集約しているのかという分析をもう少ししていかないと、滋賀県に強みがあったからそうしたんでしょうし、

あるいはダイハツさん、東レさんは今後どういう戦略で、どういう立地的に位置づけているかという分析があるのではないかと思うんですけどもいかがでしょうか？

#### <委員>

非常に難しいお話だと思います。今おっしゃいましたように、我々も国内また海外とも競争をしていかないといけないという部分はあると思います。その中でこれまで我々はこの地で構えさせていただいて、やはり豊富な労働力、そして地域的な利便性を持ちながら発展をさせていただいてきたというのがこれまでのところだと思います。今、求められているのはさらにお客様に喜んでいただけるモノづくりをしていこうと考えると今のままで良いのかというのはもちろんどこかで出てくると思います。短期的な話と長期的なところがあるかと思いますが、そういった中でもっとグローバルに、特に車でいきますと、7割、8割は部品を外から購入させていただいて、造り上げていっているという部分がこれから決して国内だけではなく、外にももっと目を向けていかないと競争力にのっていけない。このあたりがおそらく裾野の広い企業でございますので、営業としたら出てくるころがあると思われま。本体はすみません。私からは何とも言えませんが、今は私が工場長やっていますので、ここで残って必死でみんなを守ってやっているつもりです。裾野を考えるとさらにグローバル化はやはり避けられない事象として出てくるのではないかと思います。

#### <会長>

他いかがでしょうか。

#### <委員>

この資料を見させていただいて思ったことを述べさせていただきます。それは滋賀県産業の成り立ちや強みに関してです。滋賀県というのは交通の便が良く、大阪や京都等関西主要都市に近く、就労人口も豊富であり、水も豊富であるということで、ここに工場が建設された。そこから関係会社等、様々な産業が起これり今日に至った、ということが資料で滋賀県においては化学工業、プラスチック、生産機械・輸送機械が産業として大きいことから読み取れると思います。次いで滋賀県産業勃興の先陣となったグローバル企業が今後どのような動きをするのかのご質問に対してですが、残念ながらこの地で永遠に生産活動を継続できると明言出来るまでに至っていない状況だと思います。各グローバル企業は徐々に中国、韓国、台湾、タイ、インドネシア、ベトナム、カンボジア、ミャンマーまで活動拠点を広げております。当社においてもミャンマーからさらにインド以西にまで目を向けています。労働力や今後の消費期待を含む経済発展を考えるとどうしても東南アジアに視野を広げざるを得ない状況です。では日本はどうするかということですが、総じて研究開発が中心になって行かざるを得ないと感じます。ですから日本で造るものは世界で競える

最先端商品で、かつ高付加価値商品であり、技術力をもって他の国では造れないものしか日本では造らないだろうと思います。当社において滋賀は幸い研究の中心地でありますので、ここで研究し、開発したものを試作し、そこで事業開始・展開する、そしてそれがコモディティ化したならば海外へもっていくという展開をせざるを得ないと思っています。これが巨大産業となるか、又、多くの労働力を要するかというと、残念ながら一つだけではさほどの期待はできないと思います。ではどうするかというと、やはり数を増やす、裾野を広げることが重要と思います。これが機能しますと、単一企業からフィールドとして広がっていくことが期待されます。当社はライフイノベーションとして医薬・医療製品・機器を、又グリーンイノベーションとして環境素材・機器の事業展開・拡大を目指しておりますが、それに対して様々な企業さんと連携し、高付加価値先端材料製品もしくは最終製品に仕上げていくことを期待しております。以上述べました通り、一企業としては従来通りの手法ではこの地で生き続けるのは難しく、先端製品の創出と連携を図って行くことが重要と認識しており、これを以て会長質問へのお答えにしたいと思います。

#### <会長>

ありがとうございました。問題の一つがかなり明らかになってきているのではないかと思います。

#### <委員>

日本のグローバル化の中で非常に激しく動いている。しかし、実際に日本人というのは、経済理論だけでは動かないという日本人の強さというものがありますので、それがグローバル化とローカルとの組合せの中で、それはどういうことかと言うと、経済理論だけ言えば高きから低きに流れるのは普通ですから、それはどこか低いところへいったら良い。ところが実際は、経済理論だけではなく、雇用に対する独特な日本人の持つ意識感あるいはそれに対する和の文化、協力しあえると、こういうものが出たくてもまだまだ捨てがたいものがあるという認識がなくなればおそらく明日全部出ていきます。それが枯渇しないまでにうまくそこを展開していくということが非常に重要な課題だと思います。出たくても出られないという企業もたくさんローカルにはありますから。そういうところは地域でいかに自立していけるような組立てをしていくかということを考えていくということも一つの方法だと思います。ですから本当に大きな企業さんたちはやはり残るところと出ていくところを取捨選択しながら、それでも日本人の持つ文化力の中で、雇用と和という中で最大限のところ踏ん張っていこうということだと思います。グローバルについてはそのような感じがします。

#### <会長>

今の雇用も含めて、いかがでしょうか。

### <委員>

歴史的に、滋賀県に進出されている工場は元々京都から来られている企業さんが多く、本来は京都にその受皿があれば京都でと思っていた企業さんです。滋賀県がうまく誘致されて、近くということもあり進出された。リーマン・ショックまでは、伸びている企業さんと言えば、車の業界や電子部品関係とかグローバルでしておられる企業が殆どでした。しかし、リーマン以降、円高もあり大きく流れが変わりました。改めてリーマン・ショック時に車の周辺の関係で、電子部品とか電気とか鍛造とか自動車関連の企業さんが県内に随分あるということが分かりました。これは有効求人倍率が名古屋地区と滋賀県が非常に似かよった推移をしていたことでも明らかです。資料の分析の中で単なる輸送機とか金属とかに分けられていますけれど、もう少し車の周辺の部分を考える必要があると思います。

先程、お話されているように単純なモノづくりは、恐らくですけれども将来は海外に行かざるを得ないと思います。要するに付加価値の高い研究開発型企業は、今の段階では京都の企業さんもほとんど滋賀県に残される流れになっています。しかし、これは非常にありがたいのですけれど、定着していただける環境をしっかりと地元が維持していかないと、ひょっとしたら他に移される可能性があります。単なる経済合理性だけでは企業は拠点場所を決められないという一つの背景には、研究開発される社員さんが住みよい街に住みながら研究開発したいということがありますので、単なる工場誘致だけではなく、住環境含めた環境も整えていかないとなかなか全体が出来上がらないのではないかなという思いがあります。

滋賀県は住みやすいというのは、京都・大阪から近くてということもあり、文化など様々な意味でそのような方々が住んでみたい街づくりが十分できる地域だと思いますので、全体を考えながら組立てをしていただきたいと思います。

### <会長>

他にどうでしょうか。

### <委員>

日本の製造業についての本質的な議論が行われているのではないかとあらためて感じているところです。大企業の工場が多いというのは強みでもあり、ある種弱みにもつながる特徴だと思うのですが、やはり研究開発機能を備えた工場が多いということだと思いますので、そこを活かした取組もできるのではないかと思います。よく行政は大企業と中小企業のマッチングを行うのですが、大企業のトップというよりも現場に近い部門同士のマッチングやそのような機会の提供というのは、あまり行政として好ましくないのではないかなという考え方が今まではありました。実は当局の取組で中堅企業に焦点をあてた調査を今年度行っている中で、中堅企業のいわゆる部長さんたち、研究開発や人事とか海外展開とかそういった方々に異業種で集まっただけで議論をしたのですが、非常に有意義であ

ったということでした。そのような機会を行政としてもつくって行って、新たなイノベーションを生み出すということが重要なのではないかと思います。

今回の資料でもあらためて自動車産業における滋賀県の強みが浮き彫りになりましたので、自動車産業は環境面も含めまして今後益々発展していく取組ができる分野ですので、是非そこにおけるイノベーションをせっかくこれだけ異業種の研究開発機能を備えた製造部門がある滋賀県において大学との関係も近いという中で実現されるような方向を考えられたらいかかと思えます。

### <会長>

一つ論点が見えてきたと思えます。この議論このようなかたちでよろしいでしょうか。

### <事務局>

自動車産業について資料がある中のご説明を少ししておきたいと思えます。35ページをご覧くださいと思えます。データ上ですけれども、先程もう少し細かい分類がという話でしたが、この産業連関表の下の方から15行目ぐらいでしょうか。自動車というのと自動車部品・同付属品というのが分かれて載っております。自動車県内生産額というのをご覧くださいなのですが、これは先程申し上げた県内生産額といういわゆる付加価値額ではなくて、生産額そのものですので、さっきの額より大きくなっておりますけれども、自動車部品の方が4500億円です。自動車が2600億円。自動車部品が4500億円。ということで自動車部品産業の方が製造の額は大きい。その次のところで移輸出率と移輸入率が書いていますけれども、そこへその産業が外から調達しているのか中から調達しているのか、あるいは外へ出しているのか中へ出しているのかということですが、自動車産業そのもの自身は外から調達して外へ出しているということなのですが、シェアが一番右にありますように2.3%、自動車部品と製造品というのは移輸出率も移輸入率も低い、つまり県内で調達をされて県内へ出しておられる。つまり県内の自動車産業に供給されているということになるんでしょうけれども、そういった部分も結構あって3.9%占めていますので、この自動車部品・同付属品という周辺の部分というのは結構シェアも多いですし、かつ県内で調達されて県内の自動車産業へ出しておられる率もそれなりに多い。だから結構な産業になっているということがデータ上では言えるのではないかと思います。

### <委員>

大手の下請が非常に多いというお話でしたが、先程からその企業がなくなったらというお話をされていましたが、愛知県はトヨタさんの下請さんが圧倒的に多いので、リーマン・ショック以降トヨタさん離れが非常に起きてまして、トヨタさんの部品を作っていたのだけれども、医療関係の可能性を追求するとかNASAであるとか日本の場合JA

XAであるとかそういうところの部品を造るという可能性をどんどん追求しながら自分のところの事業展開をイノベーションされているというケースがかなりあります。それはなぜイノベーションできたかと言うと、自分たちがどんどん発信をしていったということと、そういう機会のあるところにアンテナをあげて出て行ったというのが大きな要素だと思っています。今、やはり滋賀県の中小企業を活性化させるには情報をとってくることに、発信をする力を大きくしていくということが大事なことであると思っています。それと会社自身が自分の本当の強みであるとか弱みであるとかそういうことをもう一度あらためて分析をし直す、自分を見つめ直すということ、そしてこれはどこにお願いしてよいのか、県にお願いするのかどうかわかりませんが、つなぐ力というものをつくっていく必要があるのではないかと考えています。

これは確認ができていないのですが、確か北九州市は海外進出に関して先進的な地域でいろんなスキームができていて聞いています。ですから北九州にある中小企業は例えば海外に進出していく時にどこにどのようにしていったら良いのか、誰をパートナーにしていったら良いのか、ということが完全に行政の仕組みとしてできていると聞きます。そのような中小企業が活路を見出すためのサポートということも大きなイノベーションのために必要であると思っておりますので、そういう整備を是非ともお考えいただけないと思います。以上です。

#### <会長>

まずグローバル化の中で県内グローバル企業が大きく転換をしていくのではないかと。おそらくは研究開発的なところを強めていくような方向性が見えてくるわけであり、そのためにはグローバル企業が滋賀県から出ていかずに、滋賀県の事業所フロアを研究開発として集約されるように、要は高度化される方向をもつためには、例えば、担い手たちが住みやすい県にしていけないといけない。また、研究開発を支える高度な技術をもった中小企業が求められるようになってくるわけであり、そういう意味では大きな流れを見据えた新しい産業政策の方向性、あるいは今出ましたように様々な分野に医療や介護などの分野の中にどう活かしていくのかといったことが、おそらくこれからの大きな議論のテーマになるのかなと議論をしていて思いました。この議論はさらにあとで続けることにして産業構造の現状認識の他にこういう論点はどうかというものはありますか。

#### <委員>

製造業が中心な県であるので、この部分を発展させるというプランとそれ以外の部分を如何に持ち上げるかということも考えていかなければならないと感じました。モノづくりというのは非常に大事でこれまで地域を支えてくださって我々の生活が豊かになってきたというのは間違いないと思うのですが、それ以外の医療、教育、サービスの分野をいかに蜘蛛の巣のように均等に張っていくかというバランスをもった将来展望をつくらなけ

ればならないと思いました。データが産業部局のデータなので、このようになっていると思うのですが例えば13ページの表では産業3部門別県内総生産というのは良いのか悪いのか何があっても横並びです。一次産業というのはこれをピンチととらえるかチャンスととらえるかではないかなという気もある意味ではします。中小企業、大企業という前によく言われているのは、農業は零細的な産業的だとか言われていますが、これは一つの起点ではないのかなと思います。つまり、食べていかないと人間生きていけないので、それをどこに求めていくかというのは非常に面白いチャンネルではないかと思います。さらに34ページの生活関連産業と域内需要産業と域外需要産業を結びつける方法というのも、論点には面白いのではないかと考えております。よく地産地消という言葉が使われていますが、この地産地消の受益者はその地域に根ざしている、住んでいる人だけではないと思っています。その地域で学ぶ人であったり、その地域で勤務をする方であったり、そういったものをマザーレイクの琵琶湖を抱える県としていかにしておもてなしをしていくかという産業構造も必要ではないかと感じましたので、製造業以外の分野もバランスよく伸ばしていけたらと感じました。

#### <会長>

ありがとうございます。他の分野でありますか。

#### <委員>

他の分野ということではなく、雇用に関することです。滋賀県は本当にたくさんの工場があるのですが、正社員の方についてはわからないのですが、パートやアルバイトの方に関しては、滋賀県には工場があるので地元の間人がそこで働くのかというと実は結構京都や大阪に出ている方が多く、驚きました。数字を見させていただいて、雇用報酬というのも関係してくるからなのかと思ったのが一点あります。また、逆に大阪などから滋賀県の工場に働きに来ている方が多い。たまたまその工場の方たちとお話しする機会があって話をしていると、ほとんどの方が京都や大阪とおっしゃっていて、なぜ京都や大阪から働きに来られるのかと思ったことをデータを見て思い出しました。だから先程住環境を整えて滋賀県に住んでいただいてそこで働くというお話もありましたが、滋賀県は環境が良いから住むのだけれども、報酬が良いので外部に働き手が出るということもあるのかと思いました。

#### <会長>

大型商業施設が非常に大阪近辺で集中しています。その影響というのは滋賀県の商業界に表れているのですか。これから商業集積がどんどん大阪にいくと、福井県からも買物に来ているという話も聞きますけれども、これはあまり今のところ出ていませんが。

### <事務局>

細かい数字として京都や大阪に出て行っているかどうかはわかりませんが、ただ先程商業のデータを示しましたがけれども、大型店は24ページ百貨店、スーパーの類で言いますと、かなり事業所数は増えてきているということで、この近辺を見ていただいても、他資本の流通系のものがあり、アウトレットのようなものがでてきております。そのような統計データはこれから出てくるのですが、量販店のようなものもかなり県内には進出してきているので、外に出て行っているものは減ってきている傾向も一部あるのかなというのの一つあります。今年になってからコンビニエンスストアや量販店のデータが県別で公表されるようになりましたので、もう少ししたら確定版がでてきて、またご提供していきたいと思いますが、そこまで分析できていない現状であります。

### <会長>

ありがとうございました。今日の議論は製造業に集中いたしまして、他の分野の産業の現状については議論できていませんけれども、また追いかけてどこかの時点でしたいと思います。とりあえず時間がきておりますので、資料2のところの議論を踏まえながら、どういう論点を選定したら良いのかということに移りたいと思います。

それでは、事務局の方から説明をお願いします。

## (2) 滋賀県産業振興ビジョン〈仮称〉策定に向けた論点整理について

(事務局より資料1、2に基づき説明)

### <会長>

今日のところは、それ程つめた議論にはならないと思いますけれども、ぜひ、みなさん全員が資料2の3、4あるべき姿、あるいは基本理念になるところを少し出し合いたいと思います。

### <委員>

夢を語るというところでお話したいと思います。

住みよさで言えば抜群に、先ほど高知県と比べていただきましたが、首都圏にはない住み心地のよさが滋賀県にはあると思います。

そのようなことで、もう少し滞在していただけるような観光であったり、例えば、高齢者の施設であったり、ゆっくりと過ごしていただけるような県になったらいいなという漠然とした思いがあります。

そして控えめな県民性ではあるのですが、何かとび抜けた一番というものがあまり見受けられないように思うので、ものすごいホスピタリティであったり、おもてなしという

京都であったり、首都圏というイメージがあるのですが、日本のモナコやニースを目指して、トップクラスのおもてなしができるような県で、ゆっくりと過ごしていただける方を増やしていただけたらなと漠然と思っております。

あとはサービス業とか間接業務をもう少し合理化というか、個々には頑張っているのだけれども大きな流れとしては製造業さんのようなスマートな感じがしないので、そういった間接とかサービス部門の整理を県としてできれば良いなと漠然と思っております。以上です。

#### <会長>

ありがとうございます。

#### <委員>

先ほどの経済の話に少し戻ってしまうのですが、他の県で仕事をさせていただいてきていまして、例えば大阪ですと中小企業のみなさんは、府内で仕事を続けていきたいのだけれども土地がない。労働力もある程度限られているということで、どうしても他府県に出ていくということが普通のことになっております。

ところが滋賀県に参りまして一番驚いたことが、中小企業のお客様の工場が、第2工場というものがあってもだいたい御本社の隣であったり、一つ離れた町にあり、ほとんど県外に工場をお持ちになるという傾向がありません。要するに出ていかなくて良いということです。これは非常に滋賀県がモノづくりのうえで恵まれていることを表しているなとも感じます。まず、土地があって労働力がある。水もある。それから近くにお取引先になっていただける大企業がある。物流があって、いろいろな面でここは非常にモノづくりをやり続けることができる県であるということをいつも感じるのですが、これが10年先もモノが安心してつくれる、みなさんが従業員の方が働けるというようなビジョンをつくっていただけたらいいなと思います。

例えば滋賀県の過去の歴史を紐解いていくと、大企業が滋賀県に工場を建ててくださって、そこにいろいろな裾野が広がっていった、そこに技術が展開されていったという経緯があると思うので、今は例えば、電気ですとか自動車ですとかというところが引っ張ってくださっているのですが、化学もそうです。今後どういう分野がさらに中小企業を引っ張っていただけたらいい分野になるのかということについてやっていくといいのではないかなというふうに感じています。

滋賀県に対する思いですが、とても素晴らしく美しい県なのに全然知られていないのがいつももったいないと思っています。東京の友達とか他の県の人に「滋賀県はすごいよ、桜がきれいだよ」とか、「お寺が素敵だよ」とか、「琵琶湖見たことある？」とか、いろいろ言うのですが、もっと県をあげて「滋賀県はすごいぞ」と言って大丈夫だと思いますので、そういったところについてお話をしたいなと思います。

#### <会長>

ありがとうございます。

#### <委員>

滋賀県はやはりすごくいいところだと思いますので、都会の方がいやしを求めてきてくださる県になってほしいと思っております。先日、バリのほうへ行ってきまして、バリは10年前観光地ではなかったという話を聞きました。どのようにして今のような観光地になったのかというような話をしていましたら、世界中のサーファーがいい波を求めてバリに来てそこから波及していったと言っておられました。リゾートの海外の有名なホテルが参入されてきてリゾート開発も行われて、今のバリがあるというように話を伺いました。滋賀県ですとバス釣りは芸能人の方も来ておられて、別荘を構えてされておられますので、そういうところからの波及も考えられると思いますので、バス釣りの大きな大会を行うなど、あとはウエイクボードというスポーツがあるのですが、そういうのでプロの選手を呼んで若い子に楽しんでもらうイベントをしたりですとか、あとはスキー場がありますので、最近雪が不足しておりますけれども、スキー場でのイベントとか、お子様向けには自然と夏休みに遊んでもらうということでアユ釣りをしてもらうなど、そういうことをもっどんどんしていけたらなと思っております。以上です。ありがとうございます。

#### <会長>

ありがとうございました。

#### <委員>

めざすべき姿かビジョン、どちらになるかよくわからないのですが、前回嘉田知事が産業振興ビジョンではあるけれども福祉や医療、観光などいろんな分野の方が関わって作っていける一つの集大成みたいなものができればというようなお話をされていて、そういうのをきっちりと入れ込んだビジョンにさせていただくのがやはり滋賀らしきを出す、かつ他地域に先行的なモデルとして示すことになるのではないかと考えているのが一つです。

もう一つは、私が専門で関わっているということもあるのですが、製造業をどう位置付けるかということが非常に悩ましい。滋賀は結構日本の最後のモノづくりの砦のようなところがあるので、かつ人口も他の地方に比べればまだ当面増え続けるというところもあり、やはり挑戦しなければいけないのではないかと。いかに日本でモノを造るかというところの一つのモデルとして示す必要があるのではないかとこのようにすごく感じています。そういう意味では先程から挙がっていた研究開発といったところの人材をどう育てていくかといったところとサービス業のところと製造業をサポートするようないろんな分野があるかと思うのですが、そういったところもきっちり育てていって一つの最後の日本の砦となるようなモノづくりのモデルというものが出してもらえたらうれしいなと思っていま

す。

#### <委員>

10年後というところちょうど今の団塊の世代の人たちは後期高齢者に入る時代になります。そのときのことを考えていろいろと動き出していかなければいけないと思います。福祉の場面では高齢者が住む場所が足りないということが起こってきております。それからもう少し若い方々でもずっとここで住み続けたいなということで研究開発等されている方々が住みやすい県だということをつくるためにも、やはり介護であるとか保育であるとか、そのようなことが充実した県にならなければ安心して暮らせないのではないかと思います。中小企業も非常に多いので、保育所もまだまだ足りません。そういったところをなんとか企業同士が協力しあい保育所をつくれないうか、ということも考えられます。介護のことについても滋賀に在るからこのようにして親の介護を安心してできるというような県になっていけば、もっとここで暮らしていく人たちが増えていくのではないかと考えております。それからシルバー産業、特にファッションであるとか、そういったものも若い人のものはデパートに行ってもいくつでもあるのですが、年配の人、男性もそうでしょうけれども、安心して買い物ができる場所であったり、食べたいもの、一人暮らしになった人たちが安心してどこでも外食できるようなところがあるというように、これからシルバー産業を展開していくというのがものすごく大事だと思います。そのようなことが豊かになってくれば、滋賀県はいいところだと思われるようになるのではないかと考えております。

#### <委員>

私も雇用という部分でいろいろと事業所のみなさんのお話を聞いているのと、本当に同じようなことを各委員さんがおっしゃっていて、県内の各企業さんがそのような状況だということがよくわかりました。

その中で滋賀をどうしていくかということですが、製造業については今までずっと滋賀の中心になってきておりそれは残り続けなければならないですけれども、それとともにやはりサービス業の部分というのをこれからは考えていかなければならないと思います。安定所で取り扱う求人にしてしましても、サービス関連、医療、介護、そのあたりが多くなってきています。また、産業を考えていくときに、それを支えていく人がどうなのかというと、雇用のミスマッチという部分で、そういったサービス業へなかなか人が流れていかないというのが現状です。今後そういったところへの人をどうしていくかということもあわせてこの中に組み入れていただけると良いかと思っております。

#### <会長>

ありがとうございます。とりわけ10年後のあるべき姿、あるいは理念について、自由に

ご発言いただければと思います。

#### <委員>

人づくりを県の特徴に出すのは難しいと思うのですが、どのような人材が10年後に生かされる人材なのか、教育のほうでぜひ考えていただきたいと思います。

#### <会長>

滋賀県の教育を産業や経済の視点からどう見れるかというのは難しいのですが、例えば、私学を考えると、他県から滋賀県へ勉強に来ている数は少ないです。たくさん京都や大阪へ流れています。この問題というのは、これでいいのでしょうか。本当に滋賀県へいい人材を連れてこようと思えば、今おっしゃった医療や介護、福祉や文化、びわ湖ホールを持っている、決定的にいい教育ができる、子供がきちんとここで学校へ行けるというのがないと、来ません。そこをどのようにするのか。良い技術者や研究者を集めようと思えば、子供を育てる教育がないと。まだしっかり議論できていないのではないかという気がいたします。

#### <委員>

関連することで、龍谷や立命館大学の学生さんとお話することも多かったですのですが、通っているのは滋賀なのですが、「どこへ行っているのか」と聞くと「京都です」と学生さんがおっしゃるのがすごくショックで、立命館さんは草津にあるのでショッピングセンターが多いからそこで買物をしてるのかと思うと京都に行くと言います。そのようなことを食い止めるというのではないのですが、いいところがいっぱいあるのですが、なぜか地名のブランドで京都と思わず言ってしまうたり、また、滋賀県であれば江州音頭がありますけど、立命館の学生さんに江州音頭を「知っているか」と聞くと「何それ」という反応が返ってきたので、教えた記憶があります。そのような地域に巻き込めるようなことを若者に対しても、やらないと結局は滋賀県に残らずに就職にしても周りにいってしまうというのはもったいないと思います。すごくやる気のある学生さんがたくさんいらっしゃるのですが、中に入ってこれないようなかたちにまだまだなっているのかなと思います。イベントごとがあれば本当に一生懸命にやれる機会があつて、それで興味を持ってもらって一緒にというのがあるのですが、なかなかそこまでまだ巻き込めてないということがあるので、これは県だけではなく、地域に住む人も学生さんを大事にではないですが、いろいろ勉強して、学校の勉強だけではなく、地域の勉強ということでも教えていただければと思っております。

#### <委員>

統計の中に観光という分野があつたと思いますが、歩いて10分のところにすごくいい温

泉があるとし、果たして温泉に行こうとなるか、心理的にはならないように思います。京都や大阪に人口流動があるとすれば、京都や大阪というところに魅力があるとすればそういうことを食い止めるという方法と、もう一つはそちらの方を滋賀の魅力にひきつけて呼び込むというのは観光ということになるかもしれないので、日本に一つしかない湖を持ちながら何百、何千年前からそうだと思うのですが、それを武器というか自然の中でとらえた中で人口の動きというのを一つ考える必要があるのではないかというような感じがしています。

また、今までの分野で、一次産業、二次産業、三次産業、製造業、サービス業、何々業というような既成の統計の業態という区分けがあると思うのですが、新たな業態をつくるという観点はどうかと思います。例えば、ここに環境というキーワードが入っていますけれど、「エコ次産業」の取組であったり、また「人産業」であったり、そういったところで各分野が持っている問題や課題やいいところや強みや弱みを出しあってつくるというのもビジョンの中ではおもしろいかなと思います。

#### <会長>

産業、農工連携とか農商工連携とっているのですが、産業のつながりみたいなものです。福祉や介護とたとえば製造業をどうつなげていくか、どうつながるか。もっといえば製造業の強みをどう他の分野で活かすか、活かしているのかという分析と、そこをどう活かしていこうとするのかというその見通しは欲しいところです。

#### <委員>

もう一つよろしいですか。今、立命館大学さん、龍谷大学さんもですけど、学生さんのトレンドは何なのでしょう。楽しみというか。たとえば先程おっしゃったバス釣りなど、そういったやりたいこと一覧表というのはないのか。それを県内で創出すると、イノベーションすると、いろんな意見が聞けて、彼らが将来 10 年 20 年先を背負ってくれるというようなことがあるのではないかとふとひらめきで言って申し訳ございません。何かそういった統計があるとおもしろいなと思いました。

#### <委員>

今の学生さんは結構冷めてらっしゃって、私たちの時代は大学と言えば車の免許を取ってドライブ行ったりということがトレンドで、学生の頃はそういうことも勉強もそうなのですがあるのかなと思ひ話しをすると、免許すら取りたくないという学生さんが今はすごく増えていて、では一体何をしているのか、ゲームかと思ひ尋ねるとそういうのにも興味がないし、何をしたらいいかわからないということを言った学生さんが本当に多かったです。何を求めたいかとかあるから多分求めないのか、これやりたいというものもないというご意見という若い大学の方が多かったので、このままで日本は大丈夫なのかと思ひま

した。しかし、それでいても、ボランティア活動は一生懸命やるとか、そういう人のためになりたいという思いはすごく持ってらっしゃるんだけど、就職であったり、たとえば食べ物、これ食べたいとか、そういうことに関してはすごく無欲というのがあったので、申し上げます。

#### <会長>

学生を資源として捉え、いろんな形で滋賀県の活性化に役立ってもらおうということですが、ほかに何か。理念みたいなことに関わる場所でも、どういうふうにしていくか、方向性などありましたらお願いします。

#### <委員>

滋賀県は非常に裕福であり危機感がないと思います。災害もありませんし、お金のことも問題ないというような非常にゆとりのある、危機感のない県だと思います。ですから何をしようという、とんがったものが非常になさすぎると思っています。とんがったものをつくるということを参考にすれば、たとえばシンガポールとか香港とかがどうしてこのようなビジネスの拠点になる国づくり、街づくりをしていったかということは非常にヒントになると思います。彼らのやっていったことは、ハブ化をするということです。ハブというのは中心なんですけれども。物流のハブなのか、金融のハブなのか、安全安心のハブなのか、飛行機など交通のハブなのか。今、シンガポールがやっていることは法律のハブになろうとしています。国際法を決めて、それをシンガポールが中心となる。世界各地から弁護士などがずいぶん学びにいらして。何か一つ、滋賀だからという、いつまでも控えめではなく、これだけは日本のハブになれる中心、No.1になれるというものをぜひとも考えるべきではないかなと思います。

#### <委員>

学生さんの話がありましたが、就職という部分での話になりますと、本当に何がしたいか就職時にそういうことがハッキリできていなく、考え方が就職ではなく就社である。そのような傾向が強いと思います。

滋賀から京都や大阪へ働いている人が多いという話がありましたが、やはり収入、賃金の部分で滋賀と近隣の京都や大阪とは賃金ベースが違ってきます。どの産業についてもそうなので、滋賀の産業を活性化して、滋賀に若い人の力を集めるということになってきましたら、やはり賃金がある程度確保されること。そのためには、それだけの力を持った産業を育てる必要があります、そここのところも考えて産業を振興していくということが大事なかなと思います。

### <会長>

ありがとうございます。前回の議論で非常に印象的だったのは、高校生の卒業時の就職口がないということです。学生が話題が出ましたけれども、滋賀県の進学率はだいたい6割ぐらいです。40%は高校を出て働くわけです。その働き口がどこなのだろうか、彼らはきちんと就職をして家庭を持ってというような構造に滋賀県はなっているのだろうか、ということはなかなか重たい問題です。最近の若い人は地元志向が強くなっていると言いますので、そこが一つの論点かなと思います。

少しお話しすると、理念とか方向性とかの問題の議論で、冒頭にグローバル化の議論をして、10年後の方向性でグローバリゼーションにどのように滋賀県経済が対応していくかという大きな視点でやらなければならない議論ですけれども、もう一つ地産地消という言葉がでましたけれども、ローカリゼーション、10年後はグローバル化してきて、みんながみんな外国ばかり向くかというところではなく、やはりローカルな生活があるわけで、先ほどから海外のお話など出ていますけれども、ではローカルな世界でどういう産業化の流れが実現するか。ご承知の方もおられると思いますが、今、里山資本主義という新書がベストセラーになっています。これは、中国地方の山村の話なのですが、似たような話は湖北にもあるのではないかと思います。

ローカリゼーションなり、地産地消なり、域内経済であったり、そういったところを視点にして10年後には、ですからそれは経済成長率では語れない世界です。収入は低いかもしれないけれども幸せな生活ができる条件がひょっとするとあるのではないかと。

これは農業や林業、漁業など全部関わってくる話で、これも一つの視点、課題として置いておく必要があると思います。

### <委員>

会長がおっしゃいましたように、そういう安心できる受皿のようなものができるとなれば、これからグローバル化が進む中で、大企業さんは世界中で活躍、中小企業も力のあるところはそうなると思うのですけれども、やはりしっかりと頑張ってもらえる人材を確保してもらおうと思えば、滋賀県で工場を持っていても十分従業員が満足してもらえる県だと言ってもらえることは、非常に影の力になるというか、そのような効果があるのではないかなと思います。

### <会長>

なかなか時間もないので、展開もできないですが、言葉出しで結構ですので、何かこういう論点があると言っていたらと思います。

### <委員>

大変良い意見がたくさん出ていると思うのですけれども、まず、先ほど会長のおっしゃ

たように、認識をどこにポイントをあてるかということです。それを受けて論点の集約を10年というある種の長期計画ですから、そのように考えてきますと認識が極めて重要で、認識の変わらない人は行動が変わらないので、行動を変えようとするとは認識を改めていかなければならない。意見はいっぱい出てきているのですが、これを認識から例えばポイントとして、現在の滋賀県なり、立ち位置がこのようになっている。実際に絡めていくと例えば、財政的な認識から言えば、先ほどお話がありました高齢者の社会なり、社会福祉をどうしますかと、医療をどうしましょうか。なんと〇兆円の〇兆円近くが医療に使われている。そのようなことを考えていくと、これは自立していかなければ仕方がないだろうと、どこかで認識しなければ仕方がないわけです。あるいは先ほどのゆっくりくつろげる、ヨーロッパというスローフード運動のようなことをしようとする、スローフードのような意識を持った人が増えないと絶対そうはならない。あるいは、リゾート的な話もありましたが、当然ながらいくらポテンシャルとして立派な湖があっても、そのポテンシャルで終わってしまう。このように考えていくとどこに認識をあてて最終的にいくつか整理すると、例えば国際化という認識も当然重要な認識ですし、そうかといって国際化が進むからと言ってローカルがダメになるということは決してありませんので、そうすると多様性の中のダイバーシティのような感覚の中で、地域の生き方とはどういう認識を持ったらいいのか。そのようなことを考えていくことが認識の整理の中で重要です。そのうえで10年のパラダイムを考えると、10年後を予言するのは難しいのですが、変化が厳しくおこってくる可能性はあると思います。幸い日本はオリンピックを誘致することになりましたから、実際にこのデータからそこから脱出していかなければなりません。それを10年後に滋賀県がやろうとすると今の若い人を見ても団塊の世代の人たちはある意味で時代を作りあげてこなければならぬという自負心で作りに上げてきた。今の若い人はいつも与えられて成長してきますから、与えられることに慣れすぎてしまっていますから、自ら作り出すということに対して若干欠けているかもしれません。そのように考えますと、過去は拡大の経済と自動化をずっと進めてきてその中で私たちのIT産業も自動化という中で成長したわけですが、ここからはおそらく成熟して最適化という社会にどんどん進んでいっている。その最適化を求めて、一つはエネルギーの最適化とはなにか。ハイブリットです。自動車の環境との成立の最適化はなにか。ハイブリットです。世の中全体の高齢者との最適化はどこへいくのか。地域の最適化はどこにあるのか。これを戦略的に考えていく力とエネルギーがないかぎり、なかなか動かないと思います。しかし、それは非常にイノベーションで、イノベーションというのは非常にリスクを伴いますので、これをやり遂げるには志が相当高くなければできないだろうと思います。そういう意味では、おそらくしばらくは最適化がこの10年の間でかなり進む時代になる。でもそれは、あくまでもつなぎであって、最適化のその次には必ず今おっしゃったように絶対的に自立しなければならないということが起こってくると思います。そういう意味では、論点や認識を整理して10年にあわせたマクロ的パラダイムの世界の中で、どこに論点をあわせていけばいいの

かということを選択の基準として考えながら、展開していくといいような気がします。

#### <会長>

ありがとうございます。まとめていただいたような気もするのですが、他にぜひ論点があればお願いします。

#### <委員>

元気な高齢者が社会を豊かにすると思っています。おそらく企業の社会貢献ということでいろんな企業の方々はボランティア活動を、推奨されていると思います。40歳台から社会参加をしましょうというプログラムをつくったり、定年退職される方々にも活躍できる場所をつくっていくのがいいと思っています。滋賀県では市民活動が非常にたくさんあります。そこではボランティアをたくさん募集しております。里山や川の保全事業、福祉というところには人材が必要です。企業の方々には、そのような文化を育てようということも考えていただければいいと思います。経営的に厳しい環境や福祉にみんなで目を向けるということで、若者たちなど一生懸命働かなければならない世代の人たちが、環境や福祉の分野でも豊かに落ち着いて仕事ができるような県になれば嬉しく思います。

#### <委員>

いろいろご意見をお伺いしておりまして、やはり近畿全体から滋賀を見た場合に、強みとして琵琶湖というのは圧倒的な魅力があると思います。その環境保全に成功されていますし、里山づくりにも関係している。そういった琵琶湖の良さを観光にも活かしていろいろな取組もできるというご提案もありましたし、ぜひ強みを活かすようなかたちで全産業的に考えていただくといいのではないかと思います。

今回、委員の中にも女性の方が非常に多いということも強みだと思いますので、今、安倍政権も女性を活かした社会というものを旗印にあげておりますから、そこを一つの観点として女性が住みよい社会というのを考えていくのも一つのではないかと思います。

企業の中でも女性の活用已成功している企業は業績が上がっているというデータもあるので、特にワーキングマザーがいきいきと働いて住むことができる、子育てもできるし、親の介護も同時にできるという、そのようなメッセージを発信できるような取組をされると滋賀に住みたいという方が本当に増えてくるのではないかと思います。具体的にはいろいろあると思いますので、保育所行政等もあると思うのですが、これも経済の観点でコミュニティビジネスとかソーシャルビジネスとか先ほどおっしゃったようなボランティアも一つの企業文化として取り入れるとかそのような発信ができればいいのではないかと思います。

### <委員>

みなさんがお話ししていることをお伺いして、産業振興の議論以前に滋賀県としてどういうふうになっていきたいのか、社会形成をどういうふうにしたいのかということが大前提になるのではないかと思います。そこをまずまとめ上げて、それに沿って、産業振興策を検討する必要があると思います。産業とは生きていく糧であり、産業振興とは何をどのようにつくるかということになりますので、滋賀県のビジョンある程度が見えたところで、その方向性にあう産業をつくっていくことが重要だと思います。もちろん滋賀県の強みとか時代の趨勢や環境等も踏まえて、滋賀らしい産業基盤に落とし込んでいく順になるのではないかと思います。

そのような滋賀県としての県ビジョンがあれば教えていただければと思います。

### <会長>

大前提の方向性を確認しようではないかというあたりですか。一度県の見解をお願いします。

### <事務局>

最後におっしゃいました県のビジョンについてであります。滋賀県の基本構想というものの見直しを始めたところでごさいます。現在総点検ということで、前のビジョンの実施状況などについての総点検を進めております。ビジョンがちょうど4年でごさいます。現在持っております産業振興戦略プランと同じ期間になっておりまして、これも来年度中に終了しますので、並行して議論をしていくことになるのではないかなと思います。

また、折に触れて全体としての滋賀県としての方向性の議論についても、この場でご紹介させていただければと思います。

### <会長>

よろしくをお願いします。

まだまだご意見あろうかと思えます。これはまた引き続いてこの論点は議論を続けていきたいと思えますけれども、第3回以降のところはもう少し整理して、どういうところに個性があるのかなというところも細かく話合いたいと思えます。

とりあえず今日の議論は私の方で中途半端にまとめることはせずに、事務局の方で次回までに整理をお願いします。

今日のところはこれで終わりにさせていただきたいと思えます。ありがとうございました。

### (3) その他

(事務連絡)

## ■閉会

### <商工観光労働部部長>

失礼いたします。本日は長時間に渡りましてさまざまなご意見をお聞かせいただきありがとうございました。

先ほど、人の動きがどうかという話がありましたが、実は私は県庁に勤めて40年弱になります。最初の頃は滋賀県から皆さん働きに出るということで、一方的に京都・大阪側へ行く通勤ということでした。反対側の電車の本数も調整しながらそれほどなかったと思うのですが、最近通勤していますと私どもがこっちに来るのと同じように、京都・大阪からこっちに来られる。それは一つは工場とか40年も経つと働く場所も増えてきたというのがありますし、さらに言いますと最近の変化はお話の中にもありましたように、世界的な全体の流れの中で、製造の場面から徐々に研究の場面へと、おっしゃるとおりコア的なマザー工場的な良い工場がたくさん滋賀県ありがたいことにこれまで積み上げでありまして、そこにどんどん研究型のところが入っている。

つまり電車に乗って来られている方の中には、いろんな技術や学歴などいろんなものをお持ちの方がどんどん滋賀県に入って来られている。京都の方へ工場が移って、京都の方から来られる方は通勤されておられるのですが、やはりそこに家族ができて、住むということになれば、当然滋賀県に家を持たれる。そのようなかたちで、新しいかたちの方々も従来のところへいろんな刺激を与えるようなかたちで入って来られる。

ということなど、お話を伺っておりまして、一つは製造業の中心的な分野の話から入ってきましたが、どうもそのあとにまちづくりというお話が皆さんから出て参りました。結局そこは「人」、そこに従事している人などの人の関係、人の動きなどを考えたときに地域にどのような産業が必要か、というような連関のお話が出ていたように思います。したがってこのビジョンもそれぞれの分野がどうかとういことももちろんございますが、そのような流れを見ていった中で、周りはどうか、先ほど街づくりと言われたところで多くの産業が関わりますので、そのような関係性を大事に見ていかなければならないなということも改めて認識させていただきました。ぜひこれからもそのような観点でいろんなご意見を頂戴したいと思いますし、また事務局がまとめていくときにもそのようなことを頭にしっかり置きながらやらせたいと思っています。

この審議会の時間は限られておりますけれども、それだけではという部分もございますので、4月以降には個々のご意見交換でありますとかそのような機会も出来れば設けさせていただきたいと思っています。大切ないろんなお話が出ているこの雰囲気をしっかり

とつなげてこれからも議論を深めていただければ大変ありがたいと思っております。

引き続きご協力のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。本日は長時間に渡りましてありがとうございました。